

フツ

知的・発

つなごう 医療

128



フットサルを楽しむ能力が高まること。

中部の最前線

を高め、就労や進学につなげていった。
 サッカー歴四十年の院長の岡村武彦さん(母も一緒にフットサルを楽しむ。「良いパスを出すために相手の状況を考える。勝つために互いに助け合う。こ

一般に「脱腸」と呼ばれる鼠径ヘルニアの日帰り手術を始めて、八年になる。会社を休めない患者らが受診し、年間三百三十件の手術件数は東海地方でも多い。「身体的な負担も術後の入院期間も、両方少なく

医人伝

するにはどうすれば良いかを考えてきた」と話す。

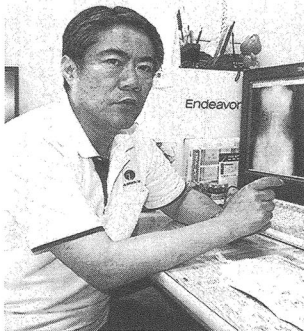
鼠径ヘルニアは、脚の付け根(鼠径)の隙間から腹膜や臓器がはみ出す病気。腹部に力を入れたときなどに下腹部に柔らかい腫れが現れ、不快感や痛みを伴うことがある。女性は、卵巣

や卵管がはみ出すことも。加齢で下腹部の組織が弱って五十〜六十代の男性に多いが、薬で治すことはできず、不快感が強い場合は手術が必要。一日以上の入院を必要とする医療機関がほとんどで、日帰り手術が可能な施設が少ない。

藤田保健衛生大で学び、国家試験の一月月前まで内科と外科のどちらに進むか悩んだ。「外科なら技術で勝負できる」。手先が器用だったこともあり、父親と同じく外科医の道を選んだ。

(いまざ外科 (名古屋市区))

院長 今津 浩喜さん(50)



「仕事などで休めず、我慢して重症になって手術を受けに来る患者も多い」と今津浩喜さん

ほどで切れ、午前中に手術した患者は昼すぎには病院を出られる。

日帰りや済むだけに簡単な手術だと思われがちで、ちよつとした違和感でも不安を感じる患者は多い。短い診察時間で信頼関係を築くため、合併症の可能性や術後に現れる症状、その時の対処法を看護師とともに丁寧に説明している。

じゃない。手術はやりにくけれど、技術を身に付けて最小限の傷口にしなさい」

その後母校の大病院に勤務し、二〇〇四年に父親の後を継ぐと同時に日帰りの

手術を始めた。臓器がはみ出す隙間をポリプロピレンのメッシュでふさぐ技術で、通常五〜六センチの切り口を二・五〜三センチに縮小し、手術時間は三十分まで短縮。腰部の麻酔は二時間

を二・五〜三センチに縮小し、手術時間は三十分まで短縮。腰部の麻酔は二時間

(袖才まり)

働く世代負担少なくて手術

568

掲示版

◇先
 区
 ベータ
 免状
 (受給
 研究所
 人5
 局1電

い治療
 同会
 ◇乳
 名古屋
 生年金
 治療や
 員18
 に)。